

国民党系ウイグル人の文化・言論活動（1946-1949 年）について

——『自由』紙にみる「テュルク」民族意識の検討を中心に——

清 水 由里子

はじめに

テュルク系の言語であるウイグル語を母語とし、スンナ派のイスラームを信仰するウイグル人は、中華人民共和国の新疆ウイグル自治区を主な居住地域とする。当地域が歴史的には比較的新しい時代に「中国」の国家領域に組み入れられたという歴史的経緯と、国家の主体民族である漢族とは言語・宗教・社会生活において異なる民族集団が辺境部に多数集住しているという現状を背景に、新疆は現代中国においてチベットとならぶ民族問題の焦点区域と目されてきた。そしてその歴史的背景を構成するのは、中華民国期にウイグル人自身が主体的に展開した社会改革運動や民族運動にほかならない。

当該時期のウイグル人の民族運動に関する研究は、1980 年代の中国や欧米における通史的専著⁽¹⁾の発表によってその先鞭がつけられ、ついで 1990 年代のわが国における現地語史料に依拠した諸研究⁽²⁾によって大きく進展した。しかしながら、利用できる一次史料の不足を背景として、一部の領域を除いては今なお未検討の課題が少なからず残されている。なかでも、新疆の近代以降の歴史研究全体に該当するポイントとして、各時代における政治事件史の流れやウイグル人の民族運動の様相の研究が進展しているのに比べて、彼ら自身の民族意識や歴史認識など、思想的側面に関する研究はいまだ発展段階にあるということが挙げられる。とくに、運動の担い手となったウイグル人指導者、とりわけ民族主義者とされる知識人たちが、それぞれの時期にいかなる民族観や歴史認識をもっていたのかということに関する検討は十分であるとはいいがたい。また、彼らがそれをどのように実践的な活動に結びつけていったのかという思想と行動の相関関係についても、依然考究すべき課題として残され

⁽¹⁾ これまでに中国および欧米で発表された通史的専著としては、『新疆簡史』[新疆社会科学院民族研究所編 著 1980] および『現代政治社会史略』[白振声・鯉淵信一編 1992]、張大軍（台湾）の『新疆風暴七十年』[1980]、フォーブス Forbes [1986] やベンソン Benson [1990] の研究が挙げられる。

⁽²⁾ 濱田 [1990]、新免 [1994a]、王柯 [1995]、大石 [1996] などの研究がその代表例となろう。

ているといえよう。

このような問題関心から、本稿では、新たに獲得された史料により検討が可能になった事例として、中華人民共和国成立直前の時期に、ウイグル人指導者であるマスウッド・サブリ Mas'ūd Şabri、イーサー・ユースフ・アルプテキン 'Īsā Yūsuf Alptekin および、ムハンマド・エミン・ボグラ Muḥammad Amīn Bughra らがウルムチで展開した活動に焦点をあてる。彼らは、先行研究においては、しばしば国民党系あるいは国民党寄りのウイグル人といわれるように、1946年にウルムチで設立された新疆省連合政府（後述）に国民党側の代表として参加し、1949年までその一員として活動をおこなっていたことで知られる。

マスウッドらの活動は、1944年に勃発したイリ反乱のなかで樹立され、当時の中国西北部を震撼させた〔毛里 1998: 210〕東トルキスタン共和国のような大規模な武力闘争をともしなうものではなかったためか、東トルキスタン共和国の実相の解明に主眼を置いた王柯〔1995〕の研究のみならず、広くこの時期の政治事件史をとりあつかったフォーブス〔1986: 196-228〕やベンソン〔1990: 42-176〕、毛里〔1998: 209-250〕などの諸研究においても、概説的・付随的にしかあつかわれてこなかった。他方、『新疆簡史』や『新疆現代政治社会史略』などの現代中国の研究においては、マスウッドらは「祖国の統一と民族団結の破壊」を企図した分裂主義者などとして描出され〔新疆社会科学院民族研究所編著 1980: 496〕、その活動についても、分析というよりはむしろ批判の対象とされてきたといわざるをえない。しかしながら、先行研究で指摘されるようにマスウッドらがとくに文化・言論面において民族主義的な活動をおこなっていたとされること、そして彼らの活動が、反ソ・反漢・反中央的な「汎トルコ主義」を標榜するものとして、やがて国民党側から危険視されるようになった〔張治中 1985: 571-579〕ことなどを考慮するとき、彼らの活動がウイグル人に対して与えたであろう影響という点において、その内実と思想的背景に検討を加えることには一定の意義があると考えられる。

そこで、本稿は、上記のウイグル人指導者たちが推進した文化・言論面における活動とその背景にある思想的な側面にアプローチすることを目的とする。そのための具体的な段取りとして、まず、1940年代における全体的な政治的状況を踏まえたうえで、彼らの活動面における組織や人的構成、活動内容などについて検討を加え、その具体的様相と性格を明らかにする。そもそもアルプテキンやボグラの活動に関しては、民族主義者の主体的な活動と思想的背景の解明という観点から、これまでに新免や筆者などによってある程度の検討が試みられてきた〔新免 1990: 17-35, 新免 1994b, 新免 2001, 清水・新免・鈴木 2007, 清水 2009: 22-29〕。ただし、彼らのウルムチにおける活動については未検討の課題として残されていた。したがって、まずはその基本的な状況を明らかにする必要がある。そのうえで、実践的な活動との関わりにおいて、彼らの具体的な主張や見解とその背後にみられる意識の

あり方に検討を加えたい。

主史料としては、1946年から1949年にかけて、ウルムチで発行されていたウイグル語⁽³⁾新聞『自由』紙 *Ärk* をもちいた⁽⁴⁾。『自由』紙は、アルプテキンが主宰し、ボグラが編集長を務めるアルタイ出版社 *Altay Nashriyati* によって、1946年12月21日から出版が開始され [*Ärk* 100: 1947/11/8/p.1]、アルプテキンらが国外に亡命する1949年9月まで発行が継続された⁽⁵⁾。『自由』紙は、当時ウルムチで発行されていた新聞各紙のうち、唯一公費によらない民営の新聞であったといわれ [新疆日報：1947/9/1/p.3]、新疆や中国内地、世界各国の状況といった時事的な情報のみならず、アルタイ出版社が主催する文化・言論面における活動の宣伝や報告、彼らの民族や歴史に関する論説などが紙幅の多くを占めている。後述するように、『自由』紙は彼らの民族主義的主張の宣伝媒体であったといっても過言ではなく、そういう意味で、史料としてあつかう際にはその偏向性を考慮に入れる必要がある。しかしながら、彼ら自身の文化・言論活動の具体的様相とその背後にある意識の形態について検討するうえでは、他史料からは窺い知ることのできない貴重な情報を提供する。本稿では、これまでの研究においてほとんど用いられてこなかったこの『自由』紙を活用するとともに、新疆省政府の機関紙である『新疆日報』（漢語版およびウイグル語版）⁽⁶⁾ や、活動の当事者である

⁽³⁾ 20世紀前半期に新疆のウイグル人がもっていた文章語は、チャガタイ語の伝統を受け継ぐ一方で、ロシア領中央アジアのアラビア文字改革の影響をも受けていた。使用される語彙や字母、母音表記の方法には共通の規範が存在せず、個々人の出身地や世代などによって異なっていた。本稿第3章で後述する言語・文字の改革は、そのような差異から生じる、行政や教育拡充のうえでの不都合を解消するためにおこなわれたものであったという [新疆日報：1948/3/25/p.3]。このような状況を踏まえたうえで、本稿では便宜上、20世紀前半期のウイグル人の文章語を「ウイグル語」と呼ぶこととしたい。

⁽⁴⁾ 『自由』紙とウイグル語版の『新疆日報』（後述）は、水谷尚子氏がその調査の成果として日本に将来したものである。いずれもバックナンバーにはかなり多くの欠落がみられるため、本稿の末尾には筆者が実見した号数を示した。これらの新聞を史料としてあつかう際、注釈では号数：発行年／月／日／ページ数の順に記すこととする。

⁽⁵⁾ 『自由』紙の廃刊の期日は不明。アルタイ出版社の一員としてその活動を担ったヘヴィル・ティムール（本稿第2章で後述）の回想によれば、アルタイ出版社は1949年9月9日に閉鎖されたという [Khevir Tömür 1983: 173]。

⁽⁶⁾ 『新疆日報』は金樹仁時代の官報『天山日報』を前身とする。盛世才に政権が移行した後、1935年12月1日に改称を経て『新疆日報』として刊行され、同月ウイグル語版『新疆日報』*Shinjang Geziti* の刊行も開始された。1947年1月から維哈文新疆日報社 *Ölkälük Uyghur Qazaq Geziti İdarasi* が分社し、以後、ウイグル語とカザフ語版『新疆日報』はこの分社のもとで出版がおこなわれた。マスウードが主席に就任した後は、アルタイ出版社の一員であるボラット・カーディリー（本稿第2章で後述）が維哈文新疆日報社の社長に就任した。そのため、マスウード主席在位期のウイグル語版『新疆日報』には、『自由』紙にきわめて近い民族主義的な傾向がみいだされる。なお、本稿でもちいた『新疆日報』のうち、漢語版は中国で公開出版されている資料を参照した。

アルプテキンやボグラの回想⁽⁷⁾なども利用しながら議論を進めたい。

史料の引用に際しての〔 〕は筆者による補足、……は省略を意味する。重要と思われる記述には強調のために下線を施したほか、適宜原語のラテン文字転写を記載した。カナ表記は、原語に近い転写をおこなうよう努めた。ただし、人名などで慣用化された表記がある場合はそれをもちいた。

I. 1940年代の政治状況

まず本章では、国民党系ウイグル人のウルムチにおける活動の前提として、ベンソンや王柯などの先行研究に依拠しながら、1940年代の全体的な政治状況を整理しておきたい⁽⁸⁾。

1930年代に新疆全土を席捲したウイグル人を中心とする民族独立運動は、1940年代にはその主舞台を天山山脈の北側に移して再燃する。1944年にイリ地区でおこった反乱は、11月にイリで東トルキスタン共和国臨時政府を成立させるとともに、イリの反乱勢力はタルバガタイとアルタイの両地区をも制圧し、天山北方の三地区をその統制下に置いた⁽⁹⁾。これが現代中国で呼称されるところの「三区革命」である。これらの反乱勢力に対抗することができなかった国民党政府は、三区勢力に軍事的・経済的な支援をおこなって影響力を行使していたソ連の仲介のもとで和解交渉を試み、その結果、両者のあいだで民族平等、言論・集会の自由、普通選挙の実施などを掲げた相互協定である11ヵ条和平協約が締結された。この協約にしたがって東トルキスタン共和国は名目上解消され、政府側と三区側の両方から人員を出す形で、1946年7月に新疆省連合政府が設立された。この時、政府主席には国民党側の張治中が、副主席には三区側の代表であるアフメドジャン Aḥmadjan が就任し、マスウード、アルプテキン、ボグラらは国民党側の代表として、それぞれ政府監察使、政府委員、建設庁長に就任した。

新疆省連合政府は、成立当初に締結された協約にもとづき、1946年秋から政府議会にあたる参議会の議員選挙を新疆全土でおこなった。この選挙の実施のあり方をめぐって、国民党側と三区側との対立が激化するなか、張治中は主席の座を下り、マスウードを自身の後任

⁽⁷⁾ 本稿では、アルプテキンの誕生から1949年に中国国外に亡命するまでの回想を、本人の口述にもとづいて記録した『囚われの東トルキスタンのために』*Esir Doğu Türkistan İçin* (1985年出版)と、ボグラが青年期から1949年までの自身の政治的な活動のあらましを記した未公開の半生記「ムハンマド・エミン・ボグラの政治人生」*Muḥammad Amin Bughraning Siyāsī Hayāti* (1950年脱稿。この史料の来歴については拙稿 [清水2009: 22] を参照されたい) をもちいた。

⁽⁸⁾ 本節の記述は、とくに注記しない限り、Forbes [1986: 163–206]、Benson [1990: 42–103]、王柯 [1995]、にしたがった。

⁽⁹⁾ 東トルキスタン共和国については、王柯 [1995] の研究に詳しい。

として指名した。この指名を受けて、国民党政府が正式にマスウードを主席に任命すると、1947年5月に、ウイグル人として初の新疆省政府主席となったマスウードのもと、アルプテキンは秘書長、ボグラは建設庁長に再任され、以後1949年1月にブルハン Burhan が主席に就任するまで、省政府の要職に就いて活動をおこなうこととなった。

さて、マスウードらの活動について検討する前提として、彼らの経歴についても簡単に説明しておく必要がある。マスウードはイリ出身のウイグル人で、トルコに留学した後、1915年から故郷のイリで新式学校教育に従事した。盛世才が政権を掌握した後、トルコやインドを経由して中国に戻り、1935年からアルプテキンの活動に合流したという [Mehmet Ali Taşçi 1985: 278-280]。アルプテキンはイェンギヒサル出身のウイグル人で、ソ連領ウズベク社会主義共和国のアンディジャンにおける領事館の書記官職を務めた後、1932年10月に南京にやってきた [新免 2001: 163]。彼自身の述べるところによれば、ソ連領中央アジアで民族主義的な思想に目覚めた彼は、かなり初期の段階で武力闘争による独立が不可能であることを悟り、中国における政治的な活動を通じての自治の希求に民族の活路をみいだすことを決意したという [Mehmet Ali Taşçi 1985: 72-76]。その言葉を裏づけるように、アルプテキンは南京で国民党政府の一員として、新疆におけるテュルク系民族の自治を求める政治的活動を展開していたことで知られる [新免 2001: 162-174]。他方、ホータン出身のボグラは、新疆からの漢人勢力の排除とテュルク民族の独立を目指し、1931年に始まった新疆における大規模な反乱のなかで、軍事的な指導者として顕著な活動を展開した⁽¹⁰⁾。最終的に、武装蜂起による民族運動が失敗に帰した後、一時ボグラはアフガニスタンに亡命し、1939年11月には、国民党の代表としてイスラーム諸国を訪問する旅の途中で彼を訪ねてきたアルプテキンと邂逅する。両者は中国政府内で自治を求める活動をおこなうことで合意し [Mehmet Ali Taşçi 1985: 380-382, Bughra 1950: 9]、その後、1943年に重慶に赴いたボグラは、とくに漢語のメディアを通して、自分たちの民族がテュルクであることを主張するとともに、政府に東トルキスタンの民族に自治権を認めるよう要求する、といった宣伝活動をおこなっていたという [Bughra 1950: 12-26]。このように、彼らは元々きわめて「民族主義的」な傾向を持っており、中国内地においても自治を求める活動をおこなっていたことが注目される。

マスウードの主席就任は、国民党寄りのウイグル人を主席に就けることで、新疆の軍事的・政治的なコントロールを中央の手に取り戻そうとする国民党政府の意図にもとづくものであり [Benson 1990: 120]、かならずしも新疆のウイグル人の要望に添ったものではなかった。そのため、マスウードの就任は、当時新疆のウイグル人居住地域において顕著な影響力をもっていた三区側の激しい反発を招いた。その反発は、東南部のトゥルファン一帯では

⁽¹⁰⁾ ボグラの1930年代の民族独立運動における活動については、新免 [1990: 17-35] に詳しい。

過激な暴動の形で現れるとともに、三区代表のアフメドジャンらによる連合政府のボイコットを引き起こした。連合政府の実権は漢族に握られていた[Benson 1990: 154–155]ことから、マスウードは、その統治期には、わずかに宗教面においていくつかの事項を決定した⁽¹¹⁾ことを除いては、何ら独自の政策を実行しえなかった。しかしその一方で、自らが三区側への牽制役としてポストをえたことを十分に自覚していた[Mehmet Ali Taşçi 1985: 445, Bughra 1950: 29] アルプテキンやボグラは、国民党政府が彼らの活動を黙認せざるをえない状況を利用する形で、テュルク民族の「高度自治」(後述)を求める民族主義的な言論活動を展開した。その活動の影響はウルムチ周辺にとどまらず、一時は南新疆の一部にまで広がりをみせた⁽¹²⁾。しかし、彼らの活動のなかに「汎トルコ主義」の危険性を感じた国民党政府によって、1949年、マスウードは主席の座から降ろされ、彼らの活動も規模の縮小を余儀なくされた。

連合政府内において自治を希求したマスウードらの政治的活動とその意義については、同時期に天山以北を中心として展開された東トルキスタン独立運動との関わりにおいて論じられるべき重要な課題の一つである。しかしながら、連合政府の対応を明らかにする档案史料へのアクセスが困難なことに加え、三区側、なかでもその背後に存在し、三区のみならず当時の新疆全体に絶大な影響をおよぼしていたとされるソ連の動向を窺い知るための史料の利用に困難をともなう現時点においては、三区勢力も含む新疆全体の状況を鮮明化し、それとの関連性において、国民党系ウイグル人の活動のあり方について立体的に論じることは容易ではない⁽¹³⁾。そこで以下では、彼らが当時の状況を利用して、ある程度独自に展開していたと思われる、文化・言論活動そのものに限定して論じることとしたい。

⁽¹¹⁾ 1948年7月の省政府の会議において、アルプテキンやボグラらの協議により、南新疆からパキスタン経由でメッカに巡礼するものたちの管理をおこなう巡礼の規則(朝汗辦法)が定められた[新疆日報: 1948/7/6/p.3] ほか、1948年11月には省政府内に宗教庁を作ることが協議されたといわれる[Ark 215: 1948/11/3/p.2]。ただし、いずれも実行に移されたかどうかは判然としない。

⁽¹²⁾ 1947年には、クチャやカシュガル市の行政長が自発的に『自由』紙の読者を集め、アルタイ出版社に購読料を送ってきており[Ark 81: 1947/9/17/p.2, 94: 1947/10/19/p.2]、また1948年から翌年にかけては、コルラやブギュルで学術座談会(後述)が定期的に開催されたことが伝えられる[Ark 205: 1948/9/29/p.2, 236: 1949/1/28/p.2, 239: 1949/2/9/p.2]。このことから、彼らの活動の影響はウルムチ以外の場所にもおよんでいたこと、また各地には、その数がどれほどかは定かではないものの、それを積極的に受け入れる人々も存在していたことが窺える。

⁽¹³⁾ 筆者は2006年7月以降、数度にわたって中国新疆維吾爾自治区档案馆において資料調査をおこなったが、1930年代および1940年代の民族独立運動に直接的に関わる档案を閲覧することはできなかった。王柯はその研究[1995]において東トルキスタン共和国に関わる多数の一次史料を駆使し、その背後にあるソ連の動向を明らかにしている。ただし、そのほとんどが未公開史料であるため、追証はきわめて難しい。

Ⅱ. 文化・言論活動の具体的様相

1) アルタイ出版社

マスウードたちが連合政府内において要職をえることができた理由は、前章でみたように当時の新疆における政治的な状況に負うところが大きかった。ただし、彼らがその状況を利用して、少なくとも言論面においては、国民党政府の思惑を超えた活動を展開していたことは、先に述べたとおりである。マスウードが1947年に主席に就任した後、彼らはその政治的な権威を背景として、文化促進会や維哈文（ウイグル・カザフ語）新疆日報社といった教育・文化方面における主要なポストを掌握した⁽¹⁴⁾。また、アルプテキンやボグラが、秘書長や建設庁長それぞれの立場から政府の資金を運用できるようになったことで、彼らの活動は一層その多彩さを増したという [Khewir Tömür 1983: 170]。

このような活動のなかで、彼らが拠点としたのがアルタイ出版社である。アルタイ出版社は、アルプテキンの言論活動の拠点として1934年3月に南京で設立されたのをはじまりとして、1946年6月24日に、ウルムチでアルタイ出版社の新疆支部として再結成されたものである [Shinjang Geziti 160: 1948/7/13/p.4]。ウルムチでは、中国内地での活動に引きつづき、アルプテキンが社長、ボグラが編集長の任を務めたほか、新たに副社長としてイブラヒム・ムティーイー Ibrahim Muṭīʾī、副編集長にアブドゥルアズィーズ・チンギスハン ‘Abd al-‘Azīz Chingizkhān、主筆にアブドゥラヒム・オトクル ‘Abd al-Rahīm Ötkür が就任した。このほか、維哈文新疆日報社の社長を務めたポラット・カーディリー Polat Qādirī やヘヴィル・ティムール Khewir Timūr、アブドゥッラー ‘Abd Allāh などもその主要メンバーとして名を連ねていた [新疆日報：1947/9/1/p.3]。

それでは、アルタイ出版社を構成していたのは、どのような出身や経歴をもつものたちなのであろうか。アルタイ出版社の副編集長であり、ウイグル文化促進会の会長も兼任していたチンギスハンは、アルプテキンが国外で集めたウイグル人の若者の一人であったといわれ、アルプテキンの命を受けて、エジプトのアズハル大学に留学した経歴をもつ [Mehmet Ali Taşçi 1985: 439]。コムル出身のウイグル人であるアブドゥラヒム・オトクルは、当時の新疆の最高学府であった新疆学院⁽¹⁵⁾を卒業したことで知られており [民族文化研究編集部 1996: 1]、

⁽¹⁴⁾ 盛世才時代以来、新疆における教育活動の主軸を担っていたウイグル文化促進会の会長としてチンギスハン（後述）が選出され [Shinjang Geziti: 1948/10/7/p.2]、新疆省政府の機関紙である『新疆日報』のウイグル語版を発行していた維哈文新疆日報社の社長にポラット・カーディリーが就任した [新疆日報：1947/9/1/p.3]。そのほか、1947年8月に開設された新疆省立語文学校と第二師範学校では、それぞれアルプテキンとアブドゥラヒム・オトクル（後述）が校長となったことが伝えられる [新疆日報：1947/8/9/p.1]。

⁽¹⁵⁾ 現在の新疆大学の前身で、1935年1月にウルムチの俄文法政学院を改組する形で設立された。マスウード

マナス出身のポラット・カーディリーもウルムチやイリで学んだ知識人であったといわれる⁽¹⁶⁾。イブラヒム・ムティーイーやヘヴィル・ティムール、アブドゥッラーらの出自や来歴はかならずしも明らかではないものの、当時のウルムチでは知識人としてその名と活動が知られた若者たちであったと考えられる⁽¹⁷⁾。南京において独自の出版活動を展開し、1948年10月からアルプテキンらの活動に合流し、後にはアルタイ出版社の社長となったハージー・ヤークーブ Hājī Ya‘qūb⁽¹⁸⁾も含め、アルタイ出版社のメンバーが、現在の民族区分にしたがえばすべてウイグル人であり、またその多くが新疆で近代教育を受けた知識人たちであったことは、アルタイ出版社の一つの重要な組織的特徴であるといえよう。

ボグラの回想によれば、連合政府が設立される以前、三区側との交渉のためにウルムチ入りしたボグラたちは、1945年10月22日に軍事学校において一つの会議を開いたという。その会議においてボグラは、現在彼らが置かれている「不当」な政治的・経済的状況を改善する最良の方策として、民族的な組織を組織し、政治的闘争をおこなうことを主張したという [Bughra 1950: 27]。彼らの政治的な到達目標は、中国内地における活動と同様に、外交と防衛を除いたすべての政治的権利を有する「高度自治」に置かれており、そのための政治的活動をおこなう合法的な拠点として組織されたのがアルタイ出版社であった。ボグラ自身、「あらゆる階層の人々に政治的・民族的な知識を与えることにおいて、われわれの出版社は一つの民族的な政党の宣伝〔機関〕としての役割を果たしていた」 [Bughra 1950: 33] と述べていることから、アルタイ出版社は、出版社という名称ではありながら、多分に政治的な意図のもとに設立され、かつ民族主義的な主張を宣伝するための拠点として位置づけられていたことが窺われる。

このアルタイ出版社を拠点として、彼らがおこなった活動とはどのようなものであったのだろうか。以下では、『自由』紙やウイグル語版の『新疆日報』などから抽出した情報をもとに、

が主席に就任していた時期には、ボグラがウイグル史の教授を務めていたという [包爾漢 1984: 327-328]

⁽¹⁶⁾ 筆者が2007年7月と2008年9月の二度にわたって実施した、トルコ共和国・イズミルにおける調査によって得たボグラの娘婿ユヌス・ボグラの口述証言にもとづく。

⁽¹⁷⁾ 1948年7月、アルプテキンはアルタイ出版社の二周年を記念する記事をウイグル語版『新疆日報』に寄稿し、アルタイ出版社が設立されるまでの経緯を紹介している。そのなかで、アルプテキンは、アルタイ出版社の主軸を担うものとして、学識が有り、かつ信念のある若者たちをボグラとともに探した。その過程でオトクル、ムティーイー、ポラット、アブドゥッラー、ヘヴィルらをえたと述懐している [Shinjang Geziti 156: 1948/7/8/p.1, 157: 1948/7/9/p.4, 160: 1948/7/13/p.4]。

⁽¹⁸⁾ ハージー・ヤークーブはブルサ (トルコ) 生まれのウイグル人で、アクスの師範学校を卒業した後、ウチトルファンでは教師を、ホータンでは新聞社の社長を務めた。1940年には民族主義的な記事を書いたという罪状で投獄され、1945年までウルムチの第四監獄で通訳を務めた。1945年に解放された後は、南京で出版活動に従事し、1948年にはボグラやアルプテキンの要請にしたがってウルムチに赴き、アルタイ出版社の諸活動において活躍したという [Hacı Yakup Anat 2003: 5-105]。

限定的ではあるものの、それぞれの活動の内容を提示し、あわせて全体的な特徴を明らかにしてみたい。

2) 出版活動・学術座談会

アルタイ出版社が文化面でなした実践的な活動は種々あるものの、その主要なものとしては、出版活動の実施、学術座談会の開催、ウイグル語改革の推進などが挙げられる⁽¹⁹⁾。まず、彼らがもっとも力を入れたのが出版活動である。彼らは「民族の覚醒を出版によってはじめること」[*Ārk* 107: 1947/11/26/p.1] を目指し、その機関紙である『自由』紙の刊行に着手した。本稿の冒頭でも述べたとおり、『自由』紙は 1946 年 12 月 21 日から出版が開始され、ほぼ週 2 回の発行ペースで、アルタイ出版社が閉鎖される 1949 年 9 月まで刊行が継続された。『自由』紙は、彼らは何よりも民族の「自由」*ärk* を希求していたことからそのように名付けられたといわれ[*Ārk* 100: 1947/11/18/p.1]、新聞の題字の横には、「われわれは民主主義者である。われわれは民族主義者である。われわれは人道主義者である。われわれの種はテュルクである。われわれの宗教はイスラームである。われわれの郷土はトルキスタンである」というスローガンが掲げられていた。このことからもうかがえるように、『自由』紙は彼らの民族主義的主張の宣伝媒体であったといっても過言ではなく、彼らの民族や歴史に関する論説などが紙幅の多くを占めている点できわめて特徴的である。なかでも目を引くのが、『自由』紙に繰り返されしめられる、「テュルク民族 *Türk millati* が何千年も昔からこの地に住んでいた」、「テュルク民族は漢族よりも古い歴史を有している」という主張であり、このことと関連して、実現こそしなかったものの、1947 年にカシュミールで刊行されたボグラの『東トルキスタン史』*Sharqī Turkistān Tārikhi*⁽²⁰⁾ の再出版が準備されていたこと [Hacı Yakup Anat 2003: 73–74]、また『東トルキスタン史』を元として、その後の時代も含めて叙述されたボラット・カーディリーの『省の歴史』*Ölkä Tārikhi*⁽²¹⁾ が 1949 年に刊行されたことも注目される。

⁽¹⁹⁾ このほか、「学術、文学、経済、歴史に関する書籍を通じて民族の意識を向上させること」を目的として、1947 年 9 月に、アルタイ出版社のなかに、ユースフ・ハース・ハージブ *Yūsuf Khāṣ Ḥājib* の名前を冠した図書館が開設されたことが伝えられる [*Ārk* 89: 1947/10/6/p.4]。

⁽²⁰⁾ Bughra 1947. 東トルキスタンにおけるテュルク民族の、古代から（著者にとつての）現代にいたるまでの通史を描いた『東トルキスタン史』は、ウイグル人の手によって民族主義的立場から著述された体系的な歴史書として注目に値する存在であり、当地域の近代史を検討するための史料としても高い価値を具えている。『東トルキスタン史』については、これまで新免の論考 [1994b] をはじめとして、筆者・新免・鈴木の共同研究 [2007] などでもその特徴や史料価値について検討が試みられてきた。ただし近年、水谷や筆者による海外調査が実施され、『東トルキスタン史』やボグラに関する新規史料が獲得されたことにより、研究は新展開をみせている。詳しくは水谷報告 [2008] および拙稿 [2009] を参照されたい。

⁽²¹⁾ Polat Qādirī 1949. 『省の歴史』は、ボラット・カーディリーがその民族的郷土と位置づける「省」*ölkä* (= 新疆省)

出版活動とならんで展開されたのが、学術座談会 ‘ilmī dernek⁽²²⁾ の活動である。学術座談会は、1948年3月1日にアルプテキンの私宅で開催されたのを皮切りに、1949年までほぼ2週間に1回のペースで開催された [Ark 252: 1949/3/16/p.1]。座談会については、1948年9月13日にアルタイ出版社で運営委員会が開催され、ボグラを中心として運営方法が協議されるなど、きわめて組織的に活動がおこなわれていたことが窺われる [Ark 199: 1948/9/15/p.2]。各座談会における活動については、残念ながら『自由』紙や『新疆日報』においてはその概要が示されているに過ぎず、具体的なことは明らかではない。ただし、本稿末尾の一覧に示したように、歴史や詩、ダスタン（叙事詩）の朗唱といった民族の歴史や文化に関わる内容のほかに、近代的な科学知識に関する講義などがもたれていたこともその特徴の一つであるといえよう。その他、マスウードの提唱により、ウイグル語の改革も推進された。この運動については次章で言及したい。

3) 活動の性格

以上みてきた言論・文化面における活動の性格をいくつかの側面からとらえてみると、まず第一に、当該活動は、基本的にはウイグル人を対象としていたということが指摘できる。この時期、彼ら自身が発行した『自由』紙や『アルタイ月刊』 *Altay Majmū‘asi*⁽²³⁾、『省の歴史』などはすべてウイグル語によるものであり、また学術座談会の毎回数百人を数える参加者も、すべてウイグル人をはじめとするテュルク系の諸民族によって占められていた。漢族に対する目立った活動としては、アルプテキンが長を務めるトルキスタン歌舞団の中国内

におけるテュルク民族の歴史を記した著作である。『省の歴史』は第一部（40頁）と第二部（146頁）からなり、このうち第一部では先史時代から楊増新時代までの歴史、第二部では1931年のコムル蜂起から1947年のマスウードの主席就任までの歴史が時系列的に記されている。第一部が、その構成や内容において、ボグラの『東トルキスタン史』の簡略版ともいべき様相を呈しているのに対し、第二部の、とりわけ東トルキスタン共和国崩壊以後（1934年）の歴史叙述は、ボラット・カーディリー自身の見聞と見解が盛り込まれた独創性の高いものとなっている。著者が第二部の序言で述べているように、『省の歴史』は1940年代当時の政治的状況を考慮して執筆されたものであるため、その叙述には『東トルキスタン史』のような強烈的な反漢・反共的主張はみられない。ただし、その内実においては、『東トルキスタン史』と同様の民族主義的傾向が存在していたことを指摘したい。

⁽²²⁾ dernek はトルコ語では、組合、協会、会合などの意を表す。ここでは、漢語版『新疆日報』の訳語、「学術座談会」にならった。

⁽²³⁾ 『アルタイ月刊』は、1943年3月、重慶でアルプテキンによって創刊された。2号から14号まではボグラが記事の執筆・編集をおこない、以後、24号まではボグラの監修のもと、オトクルが発行を担当していたという [Shinjang Geziti 160: 1948/7/13/p.4]。その後、ウルムチに活動の拠点を移したアルプテキンたちは、1946年6月にアルタイ出版社の新疆支部を設立し、それとともに『アルタイ月刊』の刊行も再開された [Khevir Tömür 1983: 171]。ウルムチで発行されていた『アルタイ月刊』は筆者未見のため、内容は不詳である。

地における公演などが挙げられるものの、その活動は単発的なものに過ぎない [新疆日報：1947/12/6/p.3]。また、言論面における活動としても、漢語版の『新疆日報』のなかにアルタイ出版社のメンバーによる寄稿がわずかにみられる⁽²⁴⁾ことを除いては、活発な動向をみいだすことができない。アルプテキンたちの中国内地における活動では、圧倒的多数を占める漢族に向けての民族問題の宣伝工作に比重が置かれていたが、この時期にはウイグル人に対するより直接的な働きかけが重視されていたといえるであろう。

第二に、彼らの活動が近代教育をうけた知識人によって主導され、出版などの活動を通じて民族の啓蒙を目指す姿勢が明確に打ち出されていたことから、彼らの運動は社会改革への志向性をもっていたことが窺える。ボグラの回想によれば、1943年に中国内地で活動を始めるにあたって、彼らはその第一目標をテュルク民族の「高度自治」に置き、国民党政府に対して働きかけをおこなうと同時に、自民族の政治・学術・文化的水準を自治にふさわしい段階に引きあげることをもめざしていたという [Bughra 1950: 12]。彼らのウルムチにおける活動がウイグル人を主たる対象としていたことから、当時の活動のなかで、自治獲得の前段階としての社会改革が目指されていたことは想像に難くない。

第三に、彼らがその活動において、「テュルク」民族意識の喚起を第一の目的としていたことを指摘したい。そのことは、前述の『自由』紙に示されたスローガンに如実に表れているといえる。また、1949年に『自由』紙上に掲載された、アルタイ出版社の活動を評して書かれた記事である「われわれの歴史において忘れられない一年」 Tārīkhimizda unutulmas bir yil には、

われわれは、過去の 1、2 年のうちに、自らの民族を知らないままにいたわれわれの民に、お前の民族はテュルクである Sening millating Türk、お前は这个世界で生きているテュルクの民の一員であると知らせた。その祖国を知らずにいた民に、お前の祖国は東トルキスタンである、お前が暮らす場所は中央アジアのすべてのテュルクの地の一部であるという知識を与えた。[Ark 232: 1949/1/1/p.1]

とあり、彼らの言論活動による宣伝がテュルク民族意識の浸透を図るものであったことが明確に示されている。

以上のように、当時アルタイ出版社を拠点として展開された彼らのウルムチにおける言論・出版活動は、その基本的な性格づけとして政治的な色彩を帯びていた。彼らの活動は、主と

⁽²⁴⁾ 1947年から1949年までの漢語版『新疆日報』のなかには、わずかにハージー・ヤーコフによる自著『回教文化史』の紹介 [新疆日報：1948/5/7/p.1, 3] や、後述するイブラヒム・ムディーイーによるウイグル語の改革運動に関する論説 [新疆日報：1948/3/25/pp. 1-3] などがみられるものの、その数はきわめて少ない。

してウイグル人を対象として想定した、自治獲得という政治目標に向けての啓蒙的活動であり、そのなかではとりわけテュルク民族意識が強調されたことが特徴として指摘できよう。

Ⅲ. 「テュルク」民族意識の強調とその背景

彼らの言論活動のうえでとりわけ強調されている、彼らが指すところの「テュルク」とは、一体何であったのか。また、それが強調されている背景は何であろうか。本章でこの問題について論じるにあたり、前提としてまず、近代の新疆におけるウイグル人の民族の呼称と意識のあり方の歴史的背景について整理する必要がある。

1) 民族意識の変容の歴史的背景

ロシア革命以前、中央アジアで民族主義的活動に邁進していたジャディード知識人たちのあいだで、テュルク民族としての一体性が意識されていたことは小松 [1996: 120-123] によって指摘されている。このようないわゆる汎トルコ主義的思想は、ガスプリンスキーの新方式教育とともに、1910・20年代の新疆にも流入していたといわれる [包爾漢 1984: 123-124]。その一方で、1920年代前半期にソヴィエトの政権下において採用された民族政策は、中央アジアのテュルク系諸民族をウズベク、カザフ、クルグズなどに細分化するものであり、同時期に、新疆のテュルク系ムスリム定住民、すなわち現在のウイグル人にあたる人々に「ウイグル」という呼称と民族的枠組みが付与された⁽²⁵⁾。

ソヴィエト領中央アジアにおける上記のような動向が、当時の新疆の知識人たちにいかなる影響を与えていたのかを知る材料は豊富とはいえず、その時点における彼らの意識のあり方について知られるところは少ない。ただし、新免 [1994a: 22-25] は、1933年にカシュガルで樹立された「東トルキスタン共和国」の指導者たちに関しては、自らを「テュルク」と位置づけるテュルク民族主義的傾向が顕著であったことを指摘しており、また同時期にホータンで起きた反乱の指導者の一人であったボグラが、前述の『東トルキスタン史』のなかで、盛世才による民族策定を人工のものとして批判し [Bughra 1940: 764]、あくまでもテュルク民族という枠組みに固執した歴史叙述を展開していることなどから、少なくとも1930年代の民族運動を率いた指導者たちのあいだでは、テュルク民族意識が主流を占めていたと考え

⁽²⁵⁾ 濱田 [1983: 354-355] によれば、1921年、当時ソ連に居住していた新疆出身者の代表者会議がアルマータで開催された。その時、ロシア人の古代ウイグル・トルコ語学者セイルゲイ・マローフの提言にもとづき、新疆のテュルク系ムスリム定住民を「ウイグル」と呼ぶことが決定されたという。これに対し、大石 [2003: 49-61] は、他律的な命名に先駆けて、すでに1910年代にはテュルク語の定期刊行物のなかにウイグルの名称が出現していたことを検証している。

ることができるであろう。

これに対し、1933年に反乱時のクーデターに乗じて新疆省政府の実権を握り、ソ連の支援を受けて新疆における支配を確立した盛世才は、12年にわたる統治の初期には民族平等を標榜する革新的な政治綱領を打ちだすとともに、その民族平等政策の一環として、ウイグルやカザフなど新疆の民族を14に区分する枠組みを採用し、それにもとづいて各民族の文化と教育の発展に助成することを約束した〔王柯 1995: 60–65〕。これをうけて、盛世才政権の初期には、とくにカシュガルを中心とする地域において、マフムード・ムヒーティ *Mahmūd Muḥīṭī* の強力な指導のもとに民族教育が飛躍的な発展を遂げた。その活動においては、指導者たちによってウイグルという呼称が採用されただけでなく、学校教育や啓蒙活動を通じて、ウイグルという呼称とそれにもとづいた意識を民衆の底辺まで普及させようとする努力がなされた形跡がある〔清水 2007: 75–78〕。ただし、当時カシュガルでマフムードと教育活動に邁進し、後にともに日本に亡命したムハンマド・エミン・イスラーミー *Muḥammad Amīn Islāmī* たちが、1941年に東京で発行した小冊子『亡命先で失われたわれわれの闘士たち』 *Muhājiratda Yoqaltghan Mujāhidlarimiz* のなかで、再び「テュルク」と称していることなどを鑑みれば、上記のような活動は、少なくともウイグルという呼称の採用に限っていえば、かならずしも彼ら自身の内発的な動機によるものではなかった可能性が窺われる。さらに慎重な検討が必要ではあるものの、新疆におけるウイグルという呼称の採用とその普及が、1934年に始まった盛世才の民族政策によるものであったということは、問題の背景・前提として理解しておく必要があるだろう。

2) 『自由』紙にみる「テュルク」民族意識

新疆省政府による新たな民族区分・呼称の採用以後、1940年代にいたるまでの状況については、現段階では、省政府の政策およびその影響を直接的に窺い知ることのできる档案史料や現地語史料の利用を実現できないため、その詳細については不明な点が多い⁽²⁶⁾。『新疆日報』をみる限りにおいては、創刊当時の1935年から一貫して盛世才の民族区分にもとづいた呼称と民族的枠組が採用されており、それは、省政府の実権が国民党勢力に移行した1944年以後も踏襲されている。『新疆日報』がウイグル語版も含め、「編集・印刷・出版・発行はすべて政府令によって本社〔＝新疆日報社〕がとりおこなう」〔新疆日報：1935/12/3/p.1〕という、省政府の機関紙であったことを勘案するならば、『新疆日報』にみられるこの

⁽²⁶⁾ カシュガル地区の状況に関しては、ウイグル語新聞『新生活』紙 *Yengi Hayat* の廃刊（1937年）を最後に史料の空白期間となるため、それ以後の現地の状況については判然としない。とくに1937年以後は、盛世才が従来の民族政策を転換し、言論面で民族的な主張に弾圧を加えた時期であったため、ウイグル語史料は皆無に等しい。

ような動向は、盛世才の策定した民族の枠組みが中華民国期を通して踏襲され、その普遍化を図る努力がなされていたことを反映するものであったと考えることができる。

他方、アルプテキンたちが、同時期に中国内地において、祖国をトルキスタン、自民族をトルキスタン人として自治を求める活動をおこなっていたことはすでに新免によって指摘されており〔新免 2001: 171〕、そのような姿勢がウルムチにおける活動でも貫かれていたことは前章で述べたとおりである。彼らの民族に対する考え方は、1947年10月19日の『自由』紙上にポラット・カーディリーの署名入りで掲載された、『『自由』紙のスローガン』 *Ärk sho'äri* と題する記事に端的に示されていると思われるので、以下に掲げる。

ある時代までは、われわれは、われわれ自身を纏頭民族、あるいはムスリム民族、ウイグル民族であるとしてきた。これらはわれわれの民族の名称ではない。われわれの民族名称はただ一つ、テュルクである。纏頭という名前は中国人たち *Chinlilar* がつけた名前である。世界にムスリム民族という民族は存在しない。ムスリムというのは民族名称ではない。イスラーム教の人々の名前である。ウイグルもわれわれの民族 *millat* の名称ではない。〔テュルクのうちの〕一つの部族 *aymaq* の名称にすぎない。〔*Ärk* 94: 1947/10/19/p.4〕

ここでとくに注目されるのは、彼らが自分たちは（テュルク系の民族という意味ではなく）「テュルク」という名をもつ一つの民族であると主張し、「ウイグル」という呼称を彼ら固有の民族名称ではないと否定している点である。このように、彼らが自らを「テュルク」と称していたことはベンソンをはじめとする先行研究でも指摘されていたことである〔Benson 1990: 165-166〕。以下で述べるように、彼らの活動に、汎トルコ主義的ともいえる要素がみうけられることは確かである。しかしながら、『自由』紙をはじめとする新聞各紙から窺える実際の動向には、より複雑で多様な要素が存在していたことにも着目したい。

主席を務めたマスウードが、留学の経験を通して強くトルコの思想や文化の影響を受けていたことは、同時代人であるアルプテキンやブルハンらも指摘するところである〔Mehmet Ali Taşçi 1985: 124, 包爾漢 1984: 110〕。また、彼らと活動をともにした、前述のハージー・ヤーコーブは、彼らが『自由』紙の題字のうえに、スローガンとは別にガスプリンスキーの「言葉、おこない、思想における統一」 *Dilde, ishde, fikirde birlik* という言葉を掲げていたことに関して、彼らのうちに広くテュルク世界との一体化を目指す意図があったと述べている〔Hacı Yakup Anat 2003: 67〕。回想で述べられたこれらの言葉の事実性を確認する術はないものの、アルタイ出版社の副社長を務めたイブラヒム・ムティーイーが、1948年3月25日に漢語版『新疆日報』で発表した記事のなかで、当時彼らがとり組んでいたウイグル語の改革に関して、

当初はマスウードの提唱により、アラビア語やペルシア語などの外来語を排除を目指すなど、トルコにならった言語・文字の改革が計画されていたと証言していること⁽²⁷⁾、また、中央政府の反対により頓挫したものの、1948年7月には、トルコ共和国に50人の留学生を派遣する計画がもちあがっていたこと〔新疆日報 1948/7/16/p.4, *Shinjang Geziti* 166: 1948/7/20/p.3, *Ark* 201: 1948/9/19/p.2〕などから鑑みて、少なくとも彼らのうちに、マスウードに代表されるようなトルコなどからの思想的・政策的影響を強く受けた知識人が存在しており、またトルコをはじめとするテュルク系の他地域との同調を目指すような動向が存在していたことは確かであろう。

他方、『自由』紙の編集長兼学術座談会の運営委員として、文化・言論活動の軸を担ったボグラは、かならずしも他地域のテュルク系の人々との連係に主眼をおいていなかった形跡がある。上述の言語・文字の改革に関して、ボグラはマスウードが提唱した、アラビア語やペルシア語を排除し、テュルク語の「純化」を目指すという方針には異論を唱え、「現在のわれわれの文字は新疆のテュルクの教育発展のためにあるべきで、歴史的にもちいてきた文字や現在使われている言葉を使用するべきだ」という姿勢を打ち出し、実際の活動も結局はボグラ寄りの方向になったと伝えられる〔新疆日報：1948/3/25/p.3〕。ボグラ自身、亡命期にトルコ大使と交流をもつなど〔清水 2009: 28〕、トルコとは浅からぬ関係を持ちながらも、彼が強調したのはテュルク世界の一体性や一体化への志向ではなく、あくまでも東トルキスタン（＝空間としては新疆と重なる）におけるテュルク民族の一体性であった。そのことは、先にも述べたように、ボグラが、東トルキスタンにおけるテュルク民族の通史を描いた『東トルキスタン史』を、ウルムチで再度出版しようと試みていたことから窺えよう。

もう一つ看過できない点は、ボグラの自著や雑誌、新聞各紙における署名入りの記事には、それを批判する場合を除いて、いかなるときもウイグルという名称が用いられた形跡がない一方で、ポラット・カーディリーが社長を務めていたウイグル語版『新疆日報』や、彼自身が著した『省の歴史』のなかには、しばしばウイグルという名称が散見されることであ

⁽²⁷⁾ 新疆日報：1948/3/25/p.3. 新聞紙上で、ウイグル語改革の動向がはじめて確認されるのは1947年10月である。漢語版『新疆日報』によれば、1947年10月30日に、マスウードやアルプテキン、ポラット・カーディリーなどを含む400余人のウイグルやカザフの知識人たちが集まり、ウイグル文化促進会で会合を開いた。会合における決議は以下のとおりであった。①現在もちいられているあらゆる外来語を廃止し、テュルク語の語彙に置き換える、②テュルク語の新しい文字を採用し、文字改革を進める、③ウイグル・カザフ語の教科書を編纂する、④正書法の統一を進める〔新疆日報：1947/11/2/p.3〕。このことと関連して、マスウードは1948年7月に、ウイグル語版『新疆日報』に正書法に関する記事を数度にわたって寄稿していることが注目される。マスウードはその記事のなかで、現在彼らが使っている正書法が不統一かつ不便であるのに対して、トルコでもちいられているトルコ語が規則的かつ合理的であることを強調しており、マスウードの提唱する言語・文字改革がトルコの言語改革の影響を強くうけていたことがうかがわれる〔*Shinjang Geziti* 173: 1948/7/28/p.1〕。

る⁽²⁸⁾。このことは、かならずしも彼ら自身にウイグル民族としての意識が定着していたことを意味するものではないにせよ、少なくとも、1940年代後半のウルムチにおいて、盛世才の民族区分とその名称がすでにある程度実態として定着しつつあった状況を反映したものであろうと思われる。

以上みてきたように、アルタイ出版社の構成員は、「テュルク」民族意識の喚起を目指すという理念においては一致していたものの、各自の活動の方向性やそれぞれが用いていた民族の呼称には、実際にはかなりの幅がみられた。さらには、彼らがその活動においてもっとも重視し、かつその意識の喚起に努めた「テュルク」民族が具体的に指示するものについてさえも、実は統一的で矛盾のない定義づけが明確には存在していなかったことが窺われるのである。しかし、そのように異なる方向性や矛盾を示しながらも、そのなかでやはり新疆のテュルク系民族としての一体性という主張が打ち出されていることは注目される点であるといえよう。

さて、以上を踏まえたうえで、彼らが省政府によって採用されたウイグルという民族区分を否定し、あえてテュルク民族という枠組みに固執した理由について最後にいくらか触れておきたい。彼らの主張は「われわれは有史以来テュルクであり、そして最後までテュルクである」[Ark 94: 1947/10/19/p.4]ということであるため、そこからその理由をみつけだすことは容易ではない。この問題について本格的に論じることは、本稿では紙幅の問題もあって難しいものの、一つの見通しとして、彼らがウイグルという名称を拒否したことの背景に、新疆における先住性の認識をめぐる、漢族ひいては中国中央の主張に対する対抗という思惑があった可能性を指摘しておきたい。

1946年7月1日に新疆省連合政府が成立した際、張治中は主席就任にあたって「全新疆の各族同胞に告ぐ書」と題する声明を発表した。そこにおいて、張治中は国家統一の擁護と民族団結の強化を強く主張し、以下のように述べた。

最近ウイグル族の同胞たちは、新疆は彼らの民族的郷土であるという。このことについてわれわれは否定することはできない。しかし歴史をさかのぼれば、新疆は漢の武帝期の紀元前146年、つまり2092年も前から中国との関係を生じさせていた。……

⁽²⁸⁾ 1948年7月16日にウイグル語版『新疆日報』に掲載されたテュルクの歴史に関する論説では、中国統治下のテュルクとして、ウイグルとカザフ、そして後の時代にやって来て定住した少数のクルグズ、ウズベク、タタール、そしてタジクと説明されている[Shinjang Geziti 163: 1948/7/16/p.4]。彼ら自身の民族名称をウイグルとする主張こそみうけられないものの、『自由』紙にも、たとえばオトクルが校長を務めた第二師範学校の学生募集の布告のなかで、「第一学年に40人のウイグルを募集する」との文言が記されており、ウイグルという民族名称と区分が実態として存在していたことが窺える[Ark 75: 1947/9/3/p.4]。

ウイグル族が外モンゴルから新疆に到達してから今にいたるまで 1100 年あまり（西暦 844 年〔以来〕）が過ぎた。しかし、南新疆で用いられている言葉とイスラームの信仰には千年もの歴史はない。……南新疆の一部の地方では、この数百年のあいだによりやくトルコ語〔土爾其語〕やイスラームの信仰が普及したばかりである。このような〔ウイグル族と新疆との〕関係は、新疆と漢族の関係の古さにはおよぶべくもないのである。〔新疆日報：1946/8/26/p.2〕

このような見解に対し、『自由』紙上にみられる主張は、ウイグルという名称はあくまで数あるテュルクの部族のうちの「一つの部族の名称にすぎない」〔*Ärk* 94: 1947/10/19/p.4〕ということであり、テュルク民族こそが新疆に古代から一貫して居住してきた民族であったことが強調される⁽²⁹⁾。『自由』紙やウイグル語版『新疆日報』に共通し、また繰り返されみられる主張は、彼らが紀元前からこの地域に住んでいた、テュルク民族の歴史は漢族のそれより古い、ということである。彼らがこの時期にテュルク民族の通史である『省の歴史』を出版し、『東トルキスタン史』の再出版を準備していたことも、こうした歴史認識を自民族全体の堅固な共通認識とし、漢族側や政府の主張がウイグル人に対して望ましくない影響を与えることを阻もうとする意図のもとになされたものであったと推測される。このことは、再出版が準備されていた『東トルキスタン史』の序言にあたる「本書を著す理由」Bu kitābni yazmaqning bā‘ithi のなかで、ボグラが以下のように述べていることから窺えよう。

実際に、われわれにとってきわめて手痛い不幸は以下のとおりである。すなわち、敵たちや敵たちを利用しようとする欲にとりつかれた一部のものたちが、自身の利益を追求め〔るために〕、われわれの昔の、あるいは最近の歴史を隠蔽し、われわれの民族がいずれの時代においても光栄に満ちた日々を送ったことがなく、つねにほかのもののたちの手のなかに囚われながら生きてきて、古来よりほかの諸民族に後れをとってきた一つの民族であるかのごとくにみせかけるようつとめていたこと、そしてつとめていることである。……まさにこのような理由から、わたくしは、偉大なるわが祖国 watan と愛するわが民族 millat の昔の、そして最近の歴史に関する正しい情報を集め、

⁽²⁹⁾ 新疆における民族の枠組みや名称に関しては、ボグラは 1944 年に『中央日報』紙上において、漢族研究者黎東方との間で論争をおこなっている〔伊敏・黎東方 1945〕。黎東方が、ウイグル、カザフ、クルグズなどの諸民族の歴史や民族的特徴にみられる差異を挙げることによって、これらの諸民族を一つの「テュルク民族」とみなす見解を否定しようとしたのに対し、ボグラは、それらはいずれもテュルク民族の一部にしか過ぎないことを証明しようと試みた。そのなかで、ボグラがテュルク民族を「新疆の土着の民族」とであると主張していることが注目される。

愛するわが民族に、その歴史的な地位を示すこと、そしてその何千年にもわたる榮譽と偉大さをしらせること〔という〕つとめを、わが身に〔課せられた〕神聖な義務であると考えている。⁽³⁰⁾

ここでとくに注目されるのは、ボグラが、彼自身が考える「正しい」歴史を自民族に示し、自民族にその「歴史的な地位」と「何千年にもわたる榮譽と偉大さ」を知らしめることを目的として『東トルキスタン史』を著す、と述べていることである。

さらなる検討が必要ではあるものの、この時期に、彼らがテュルク民族であることを主張した背景には、先行研究において指摘されているような汎トルコ主義的な思想よりはむしろ、彼らが民族的郷土と位置づける東トルキスタン、すなわち新疆に対する先住性の主張とそのような考え方のウイグル人に対する浸透という意図があったと考えることができるであろう。

おわりに

1940年代のウルムチにおいて、国民党の代表として新疆省連合政府に参画したマスウードらは、政府の一員でありながらテュルク民族の「高度自治」を求める言論活動を展開した。なかでも、彼らがアルタイ出版社を拠点としておこなった文化・言論面における啓蒙的活動と民族主義的な宣伝活動は、テュルク民族意識が強調されたという点できわめて特徴的であった。彼らがその活動においてもっとも重視し、かつその意識の喚起に努めた「テュルク」民族の定義に関しては、実際には彼らのなかでさえ統一された見解が存在していたとはいいがたい。ただし、そのなかで新疆のテュルク系民族としての一体性という主張が打ち出されていたことは注目される点であるといえよう。

1930年代のカシュガルのウイグル知識人たちは政府の民族名称を受容し、ウイグル民族としての歴史を「再発見」、あるいは「創出」する努力をおこなった〔清水 2002: 258-263〕。他方、本稿で明らかにしたように、マスウードたちは1940年代後半のウルムチで展開した文化・言論活動において、ウイグルという呼称を否定し、テュルクこそが東トルキスタンにおいて古代から連綿と続く統一された民族であると主張した。これらの二つの動向は一見矛盾するようにも思われる。しかしながら、彼らの活動の根底にあるものは、現在の新疆にあ

⁽³⁰⁾ Bughra 1948: 3. 『東トルキスタン史』再出版の計画は政情の悪化によって頓挫したものの、当時刷られたゲラは、先に述べたボグラの娘婿ユーヌスによって現在も保管されている〔清水 2009: 31〕。なお、1948年版『東トルキスタン史』の「本書を著す理由」は、基本的には1940年に書かれた『東トルキスタン史』のオリジナル・テキストのそれと同じ内容であることをつけ加えておきたい。

たる地域が「われわれ」の民族的郷土であるという主張であり、そして、「われわれ」が漢族より昔からこの地に住んできたという主張であった可能性を指摘したい。中華民国期は、近代的な意味での民族区分が策定され、定着する過渡期にあたり、民族の自称や民族的郷土の呼称、またそれが指し示す範囲については、同じ民族主義者と称された知識人のなかでも差異がみられる。それは、それぞれの知識人の思想のみならず、彼らがその当時置かれていた政治的・社会的立場に起因する部分もあったと思われるが、先にも述べたような新疆における先住性と領土権の主張という点においては共通性を示しているといえよう。

ウルムチで自治を希求し、その前段階としての文化・言論活動を繰り広げたマスウードたちの努力は実を結ぶことはなかった。新疆省連合政府は国民党中央政府によって再び改組され、1949年1月にはマスウードにかわってブルハンが省政府主席となった。その後、国共内戦を有利に進めつつあった中国共産党が中国西北部に進出すると、人民解放軍の接近を前にして、アルプテキンやボグラをはじめとする人々は国外に亡命し、1949年9月にはアルタイ出版社も閉鎖された⁽³¹⁾。アルプテキンやボグラらは、今度は中国という国家の外側から、自民族の解放をもとめて活動を展開することになる。

本稿でとりあつかった範囲は時代・地域ともに限定されており、マスウードらのウルムチにおける活動の歴史的な位置づけとその意義を明らかにするためには、彼らの政治的活動の検討はもちろんのこと、他の地域、とくに同時代の東トルキスタン共和国を樹立させたウイグル人指導者たちの活動との比較検討の作業が必要であろう。また、本稿では紙幅の関係上、部分的にしか触れえなかった『東トルキスタン史』や『省の歴史』については、それぞれの歴史叙述にみられる特徴やそこに表れている民族意識の内実を詳細に検討することによって、いまだ知られるところの少ない近代におけるウイグル人の意識のあり方について、より深く考察することが可能になるとと思われる。その実証的な検討は今後の課題としたい。

⁽³¹⁾ アルタイ出版社の主要メンバーのうち、ボラット・カーディリーはアルプテキンらとともに亡命し、マスウード、オトクル、チンギスハン、ヘヴィル・ティムール、イブラヒム・ムティイー、ハージー・ヤークーブらは新疆に残った[Hacı Yakup Anat 2003: 138]。このうち、マスウードとチンギスハンは1952年に処刑されたという[Hacı Yakup Anat 2003: 166]。

学術座談会一覧

第1回	日時・場所	1948/3/1・於アルプテキン宅(60人)
	主な内容	ロシアでロシア人に殺された民族主義者の息子であるひとりの詩人による詩の朗読
	典拠	Mehmet Ali Tasçi 1985: 465, <i>Ark</i> 252: 1949/3/16/p.1
第6回	日時・場所	1948/6/5・於ウイグル文化促進会(200人)
	主な内容	ボラット・カーディリーによる開会の辞、マスウードによる文字統一の重要性に関する報告、ボグラによる優秀詩歌の表彰、ボグラらによる詩の朗唱、青年歌舞団による上演
	典拠	新疆日報: 1948/6/7/p.3
第7回	日時・場所	1948/6/11・於ウイグル文化促進会(200人)
	主な内容	マスウードによる新疆の50年来の文化教育についての講釈、ボグラによる「庫里特精(?)」碑文の意義の解釈、語文学校の学生による民間詩歌の朗唱
	典拠	新疆日報: 1948/6/14/p.3
第8回	日時・場所	1948/6/19・於ウイグル文化促進会(200人)
	主な内容	ボラット・カーディリーが司会、歌舞の上演、イブラヒム・ムティーイーによる「500年前のテュルクの大詩人」ナワイの人生と作品についての講義、アブドゥルアズィーズ・マフスムによるイスラーム教道徳観の講演、ボグラ、オトクルらによる学術講演
	典拠	新疆日報: 1948/6/22/p.3
第10回	日時・場所	1948/9/11・於アルタイ出版社文化部(300人)
	主な内容	マスウードによる「結婚交配と遺伝」に関する講演、チンギスハンによる無題のダスタンの朗読、オトクルによる「イパルハンの物語」の朗読、学術座談会の運営委員会に関する討議、委員として、ボグラ、イブラヒム・ムティーイー、ボラット・カーディリー、オトクル、チンギスハンら9人が選出
	典拠	<i>Ark</i> 199: 1948/9/15/p.2, 新疆日報: 1948/9/16/p.4
第13回	日時・場所	1948/11/6・於ウイグル文化促進会(300人)
	主な内容	ボラット・カーディリーが司会、チンギスハンによる「トルキスタン」という名称の由来とその歴史的根拠に関する講演、ボグラとボラット・カーディリーによる補足、ボグラらによる前回の座談会における文芸講評、第二師範学校および第三女子中学校の学生による歌舞の上演
	典拠	<i>Ark</i> 217: 1948/11/10/pp.1-2, 新疆日報: 1948/11/11/p.4
第15回	日時・場所	1948/12/4・於カザフ・クルグズ文化促進会(350人)
	主な内容	医師アブドゥルルーフによる伝染病に関する講演、マスウードらによる補足、アブドゥルアズィーズらによる自作の詩や、故アブドゥハリク・ウイグルの詩の朗読、婦女の知識向上に関する討論
	典拠	<i>Ark</i> 225: 1948/12/5/p.2
第16回	日時・場所	1948/12/18・於カザフ・クルグズ文化促進会(400人)
	主な内容	ボラット・カーディリーによる開会の辞、マスウードによる梅毒に関する講演、13・14回座談会における優秀詩作の表彰、ウズベク文化促進会のサイド・ニヤーズや、カザフの若者たちによる演奏、ボラット・カーディリーらによる漫談の上演
	典拠	<i>Ark</i> 230: 1948/12/22/p.2
第18回	日時・場所	1949/1/29・開催場所不明(200人)
	主な内容	ボグラによるテュルク・タタールの歴史に関する講演と討論、詩人オトクルによるダスタンの朗読
	典拠	<i>Ark</i> 237: 1949/2/2/p.2
第19回	日時・場所	1949/2/不明・於カザフ・クルグズ文化促進会(200人)
	主な内容	ボラット・カーディリーによるテュルクの歴史というテーマの講演、ボグラによる「1万2000年の栄誉ある歴史を持つテュルクの歴史」に関する講演
	典拠	<i>Ark</i> 242: 1949/2/16/p.2
第21回	日時・場所	1949/3/12・於カザフ・クルグズ文化促進会
	主な内容	学術座談会の一周年記念と総括
	典拠	<i>Ark</i> 252: 1949/3/16/p.1
第22回	日時・場所	1949/3/26・於カザフ・クルグズ文化促進会
	主な内容	ボグラによる原子力の効用と兵器としての危険性についての講演、女子学校の学生たちによる唱歌、新疆学院、語文学校、師範学校の学生たちによる詩の朗読
	典拠	<i>Ark</i> 256: 1949/4/1/p.2

史料

1. アルタイ出版社刊行物・ボグラ関連史料

1) *Ārk. Ürümchi: Altay Nashriyāt Idārasi*(Altay Nashriyāti)

*no.74(1947/9/1)—no.283(1949/5/26): no.74, 75, 77, 79, 81, 83, 84, 86–89, 91–94, 98–100, 102–109, 113–115, 116, 118, 125, 193, 194, 196, 197, 199, 201, 205–207, 211, 214–220, 222, 225, 226, 228–230, 232, 233, 236–240, 242, 243, 246–248, 251–258, 263, 265–270, 272–275, 277–280, 282, 283.

2) Polat Qādirī. 1949. *Ölkä Tārīkhi. Ürümchi: Altay Nashriyāt Idārasi.*

3) Muḥammad Amīn Bughra. 1940. “Sharqī Turkistān Tārīkhi.” Kābul (*unpublished).

———1947. *Sharqī Turkistān Tārīkhi.* Kashmīr: Sharqī Turkistān Millī Birlik Jam‘iati.

———1948. “Sharqī Turkistān Tārīkhi.” Urumchi (*unpublished).

———1950. “Muḥammad Amīn Bughraning Siyāsī Hayāti.” Kashmīr (*unpublished).

2. 『新疆日報』

1) 『新疆日報』烏魯木齊：新疆日報社

*1935(Dec), 1936(Jan–Dec), 1937(Mar), 1938(Nov–Dec), 1939 (Jan–Dec), 1940(Jan–Dec), 1941(Jan–Dec), 1942(Feb–Sep), 1943(Jan–Dec), 1944(Jan–Dec), 1945–1948: 1945(Jan–Oct), 1946 (Apr–Dec), 1947 (Jan–Dec), 1948(Jan–Dec)

2) *Shinjang Geziti.* Urumchi: Ölkälük Uyghur Qazaq Gezit Idārasi.

*1947–1949: 1947(no.248, 249), 1948(no.150–171, 173–175, 223–232, 234–245), 1949 (no.174, 175, 178, 181–185, 187–216, 218–222)

参考文献

Benson, Linda. 1990. *The Ili Rebellion: The Moslem Challenge to Chinese Authority in Xinjiang 1944–1949.* New York: M. E. Sharpe, Inc.

Forbes, Andrew D. W. 1986. *Warlords and Muslims in Chinese Central Asia: A Political History of Republican Sinkiang 1911–1949.* New York: Cambridge University Press.

Hacı Yakup Anat. 2003. *Hayatım ve Mücadelem.* Ankara: Özkan Matbaacılık.

Hamada, Masami. 1990. “La Transmission du Mouvement Nationaliste au Turkestan Oriental (Xinjiang).” *Central Asian Survey*, vol.9, no.1: pp. 29–48.

Khewir Tömür. 1983. “Altay Nāshriyati wā Bashqa Ishlar Toghrisida Āslimā.” *Junggo Khālq Siyasiy*

- Mäslihät Kengishi Sh U A R Komiteti Tarikh Materiyyalliri Tātqiqat Häy'iti(ed) *Shinjang Tarikh Materiyyalliri*, Ürümchi: Shinjang Khālq Nāshriyati, 11: pp. 163–176.
- Mehmet Ali Taşçı. 1985. *Esir Doğu Türkistan İçin: İsa Yusuf Alptekin'in Mücadele Hatıraları*. İstanbul: Doğu Türkistan Neşriyat Merkezi.
- Muhammad Amīn Islāmī. 1941. *Muhājiratda Yoqaltghan Mujāhidlarimiz*. Tokyo.
- 白振声・鯉淵信一編 1992.『新疆現代政治社会史略（1912–1949）』北京：中国社会科学出版社
- 包爾漢 1984.『新疆五十年』北京：文史資料出版社
- 濱田正美 1983.「十九世紀ウイグル歴史文献序説」『東方学報』53: pp.353–401.
- 水谷尚子 2008.「ムハンマド・エミン・ボグラと『東トルキスタン史』を語る——娘婿ユヌス・ボグラ、娘ファティマ・ボグラの口述——」『日本中央アジア学会報』4: pp. 29–39.
- 毛里和子 1998.『周縁からの中国——民族問題と国家——』東京：東京大学出版会
- 民族文化研究編集部 1996.「維吾爾族作家烏鉄庫爾先生逝世」『民族文化研究』, p. 1.
- 大石真一郎 1996.「カシュガルにおけるジャディード運動——ムーサー・バヨフ家と新方式教育——」『東洋学報』78: pp. 1–26.
- 2003.「テュルク語定期刊行物における民族名称「ウイグル」の出現と定着」『東欧・中央ユーラシアの近代とネーションⅡ』札幌：北海道大学スラブ研究センター, pp. 49–61.
- 王柯 1995.『東トルキスタン共和国研究——中国のイスラムと民族問題——』東京：東京大学出版会
- 清水由里子 2002.「*Yengi Hayāt* にみる『ウイグル』について」『中央アジアにおける共属意識とイスラムに関する歴史的研究』（平成11年度～平成13年度科学研究費補助金・基盤研究A-2研究成果報告書）, pp. 245–264.
- 2007.「カシュガルにおけるウイグル人の教育運動（1934–37年）」『内陸アジア史研究』22: pp. 61–82.
- 2009.「ムハンマド・エミン・ボグラに関する一考察——その思想形成の背景と著作『東トルキスタン史』を中心に——」『日本中央アジア学会報』5: pp. 21–36.
- 清水由里子・新免康・鈴木健太郎 2007.『ムハンマド・エミン・ボグラ著『東トルキスタン史』の研究』東京：NIHU プログラム・イスラーム地域研究東京大学拠点
- 新免康 1990.「新疆ムスリム反乱（1931–34年）と秘密組織」『史学雑誌』99（12）: pp. 1–42.
- 1994a.「「東トルキスタン共和国」（1933–34年）に関する一考察」『アジア・アフリカ

言語文化研究』46・47: pp. 1-42.

——1994b. 「「辺境」の民と中国——東トルキスタンから考える——」 溝口雄三・浜下武志・平石直昭・宮嶋博史編『アジアから考える [3] 周縁からの歴史』東京：東京大学出版会, pp. 107-139.

——2001. 「ウイグル人民族主義者エイサ・ユスプ・アルプテキンの軌跡」 毛里和子編『中華世界——アイデンティティの再編』（〈現代中国の構造変動〉第7巻）東京：東京大学出版会, pp. 151-178.

新疆社会科学院民族研究所編著 1980. 『新疆簡史』（3）烏魯木齊：新疆人民出版社

伊敏・黎東方 1945. 「關於新疆突厥民族問題的爭論輯」『阿爾泰』1卷2期: pp.605-613.

張大軍 1980. 『新疆暴風七十年』台北：蘭溪出版社

張治中 1985. 『張治中回憶錄』北京：文史資料出版社

（中央大学大学院文学研究科博士後期課程）